

JG A NEWS



2012 年 (平成 24 年) 6 月 **50 号**

CONTENTS

• トピックス

後発医薬品促進へ勉強会発足、大塚元厚労副大臣ら 1

• リレー随想 (稲岡 靖規) 3

• お知らせ

平成 23 年度ジェネリック医薬品シェア分析結果について 5

第 55 回日本糖尿病学会年次学術大会 7

2012 年度環境ポスター・キャッチコピー入選作品について 8

2012 年度環境ポスター・キャッチコピー最優秀賞受賞者より... 9

2012 年度環境ポスター・キャッチコピー最優秀賞作品 10

• 第 45 回定期総会報告 11

• 第 45 回定期総会懇親会報告 12

• 賛助会員から

コーア商事株式会社 13

• 活動案内 15



後発医薬品促進へ勉強会発足、大塚元厚労副大臣ら

民主党の大塚耕平参院議員（元厚生労働副大臣）と小西洋之参院議員が呼びかけ人を務める「後発医薬品使用促進勉強会」が5月に発足した。2012年度末までに後発医薬品の数量シェアを30%以上に拡大する目標の達成や、それ以降のさらなる使用促進などを後押しする方策などを議論する。政府が作成する後発医薬品使用促進の新たなロードマップに関する検討を行うことも視野に入れている。

政府は12年度末に後発医薬品の数量シェアを30%以上に到達させる目標を掲げているが、直近のデータ（11年9月薬価調査）では22.8%にとどまっており、目標とは大きな開きがある。そのため政府は4月の診療報酬改定で一般名処方加算の新設、後発医薬品調剤体制加算の見直し、薬剤情報提供文書を活用した後発医薬品の情報提供など新たな施策を打ち出した。今後は13年度以降の新たな目標設定や、後発医薬品使用促進に関する新たなロードマップ策定などを行う。そうした状況のなかで大塚参院議員らは後発医薬品使用促進を議員側から後押しするため、今回の勉強会を発足させた。私的勉強会の位置づけで、年内に4～6回程度の会合を開く。

5月15日に開いた初会合には、議員や薬局関係者など約60～70人が参加。大塚議員は冒頭のあいさつで、「この勉強会を発火点として国会や経済界のなかに後発医薬品の必要性についてより深い理解をしていただける方を増やしていくことが非常に重要。30%以上といわず、もっと高い率を目指していかないといけない。50%、60%となるよう進めていきたい」と使用促進を積極的に後押ししていく姿勢を示した。

初会合では、厚生労働省の武田俊彦参事官（社会保障担当）や、日本ジェネリック医薬品学会の武藤正樹代表理事が、12年度改定で実施された後発医薬品使用促進策などについて講演した。

武田参事官は、30%の目標達成について「11年9月時点のシェアは22.8%で

あり、30％はかなり難しいのではないかとということであったが、今年 4 月改定の影響が非常に大きく出ているのではないかとされている。特に一般名処方加算は非常に大きな影響を現場に及ぼしている」と新たな施策の効果に期待を示した。

同加算に関する薬局の対応をめぐり、一部で混乱が生じたことについては、「薬局は一般名処方の推進を望んできたのではないか。まかり間違っても『対応できない』『混乱がある』という言葉が薬局側から出てきては本来おかしいと思う」と述べた。

13年度以降の新たな目標については、「（最初の目標を設定してから）5 年が過ぎる。状況変化をふまえて新たな数字が出てくるのではないかと述べるにとどめた。

武藤代表理事は、30％の目標達成について「22.8％から30％への道はなかなか険しい」としつつ、今年 4 月改定で打ち出された新たな使用促進策を評価。とくに一般名処方加算については「結構インパクトがある」と語った。

今後の課題については、海外各国と日本の医薬品市場における長期収載品や後発医薬品などの割合を比較したデータを紹介した上で、「日本の医薬品市場では後発医薬品（の割合）が少なく、長期収載品に偏重している。もし長期収載品の価格を後発医薬品なみに下げれば約 1 兆円の削減効果があり、医療費の自然増を補える。長期収載品と後発医薬品の薬価をどのように考えていくか大きな課題だ」と指摘した。



鑑 賞

株式会社ポーラファルマ

稲 岡 靖 規

よい作品に触れることによって感性が高まるとよく言います。

確かに著名な美術・芸術作品をみて、訴えかけられるような、後ろ髪を惹かれるような感覚を持つ、クラシック音楽を聴いたら頭の中でさまざまな思いがグルグルまわる、なんて経験が多くあります。同じ作品に触れても、どのように感じるか、思うか、は、個人によって異なるものでしょう。私は、こういった、感じる事が、鑑賞の入り口であり、さまざまな想像力が働き、創造性につながっていくものと考えています。

先日、箱根のポーラ美術館へ行ってきました。およそ半年単位でテーマ展示を変えていて、現在は、「印象派の行方 モネ、ルノワールと次世代の画家たち」と題する展示が行われています。印象派の作品は、ポーラ美術館の西洋絵画コレクションの核をなすものですが、今回の展示は、モネ、ルノワールを中心とするフランス印象派が、20世紀に活躍する次世代の画家たち、ボナール、マティス、ピカソらにいかなる影響をもたらしたのかを、検証するテーマとしています。

展示内容を紹介して解説できるほど、私には知識ありませんが、直接近距離で自分の目でみて、何かを感じた作品名を少し紹介させていただきます。

セーヌ河の日没、冬（モネ、1880年）、ロバに乗ったアラブ人たち（ルノワール、1882年頃）、ムール貝採り（ルノワール、1889年頃）、エトルタの夕焼け（モネ、1885年）、ジヴェルニーの積みわら（モネ、1884年）、以上が1880年代、印象派を離れたモネとルノワールのテーマ。

次の、最後の印象派展をめぐる画家たちのテーマでは、グランカンの干潮（スーラ、1885年）、ヴィゲラ運河にかかるグレーズ橋（ゴッホ、1888年）。1900年以降一次世代のまなざしのテーマで、バラ色のボート（モネ、1890年）、睡蓮

の池（モネ、1899年）、カーニュの風景（ルノワール、1905年）、髪飾り（ルノワール、1888年）、母子像（ピカソ、1921年）。

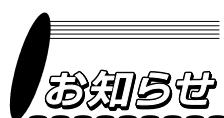
作品の前で数分間、感じるがままに、浮かんでくる言葉、なぜそのような言葉が浮かんできたのか、自分とのつながり、そして考える、この繰り返しで自分の世界に浸り、物思いに耽ってきました。作品鑑賞を引き金に、個人それぞれが持つ、経験や人生観が大きく左右して、自分としての考えること、ができるものと思っています。このような刺激機会を持つことは自分を見つめ直すためにも大事だと思います。

そして、併設のレストラン、アレイでは、「ルノワール家のごちそう」と題する企画展コース、ルノワールが愛し、一家の食卓に並んだとされるメニューを堪能し、本当に有意義な一日でした。作品の鑑賞によって感覚や想像力が刺激を受け、食事や箱根の自然からも大きなエネルギーを授けられたと思っています。

みること、聴く、嗅ぐといった五感を通じて、感じる力、創造力を高めることは、日常の仕事においてもとても重要ではないでしょうか。

去年は、レオナール・フジタ（私のパリ 私のアトリエ）、その前が、アンリ・ルソー（パリの空の下で ルソーとその仲間たち）でした。両方とも、ポーラ美術館の得意とするコレクションですが、フジタ展では、2011年に新たに加わった、小さな職人シリーズも夏以降に追加展示され、圧巻で、しばらく離れることができませんでした。フジタの乳白色の謎を解明する研究成果もまとめられており、フジタ好きにはたまりません。この原稿が掲載されるころには次の企画展示となっているかもしれませんが、今年の夏から、開館10周年記念の企画が計画されており、次のリフレッシュを楽しみにしています。

次号は、アイロム製薬株式会社の羽田野社長にお願いします。



平成23年度ジェネリック医薬品シェア分析結果について

平成23年度のジェネリック医薬品シェア分析結果が、以下の通りまとまりましたので、ご案内申し上げます。

期間：平成23年 4 月～24年 3 月

★シェア： 数量ベース : 23.3%（前年22年度 23.0%）
 金額（薬価）ベース： 9.6%（前年22年度 9.4%）

（参考）

ジェネリック医薬品の国内シェアの年次別推移（過去 5 年間）

	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	23 年度
数量 (%)	16.9	17.2	17.6	20.3	23.0	23.3
金額 (%)	5.7	6.2	6.8	8.5	9.4	9.6

日本ジェネリック製薬協会調べ（一部 I M S データ使用）

数量：出荷数量

金額：薬価ベース

（注）21年度より調査方法が変わっているため、20年度以前と21年度以降の数値は単純な比較はできない。

【問い合わせ先】

日本ジェネリック製薬協会

総務委員会

委員長 海宝 徹

電話 03-3279-1890

理事長 長野健一

電話 03-3241-2985

シェア分析参考データ

投与経路別データ

年度	数量シェア（％）				金額シェア（％）			
	内用薬	注射薬	外用薬	全医薬品	内用薬	注射薬	外用薬	全医薬品
平成21年度	20.5	23.2	16.9	20.3	8.4	8.0	10.2	8.5
平成22年度	23.4	25.1	17.5	23.0	9.6	8.3	10.9	9.4
平成23年度	23.7	26.5	16.7	23.3	10.0	8.6	10.1	9.6

日本ジェネリック製薬協会調べ（一部IMSデータ使用）

平成23年度四半期ごとのシェア（速報値）

	平成 23 年度（速報値）			
	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
数量（％）	23.1	23.2	23.6	24.2
金額（％）	9.5	9.7	9.8	10.1

日本ジェネリック製薬協会調べ（一部IMSデータ使用）

（注）上表四半期ごとの数値は、GE薬協の理事・監事会社等のデータ及び一部IMSのデータを基に、推計した速報値である。したがって、全会員会社を対象とした年間通しての調査結果とは若干の相違がある。

☆ 第55回日本糖尿病学会年次学術大会

2012年(平成24年)5月17日(木)～5月19日(土)の3日間、パシフィコ横浜(横浜市西区みなとみらい1丁目1番1号)で開催されました「第55回日本糖尿病学会年次学術大会」にて、当協会が展示ブースを出展いたしました。

4月に出席した「第109回日本内科学会総会・講演会(京都、みやこめっせにて開催)」に引き続き、医家向けへのPRを主目的として出展いたしましたが、医師だけでなく、コメディカルの方も多数来場され盛況のうちに無事終了いたしました。

展示ブースは合計76社が出展、新薬メーカーの大型ブースが目立つ中、当協会の展示ブースにもジェネリック医薬品に対する質問や疑問をもった方が多数来場され、説明員も熱の入った対応となりました。当協会が重点PRしている情報提供システムについても、関心を示す方のみならず既に有効利用をされている方もおられ地道な広報活動が徐々に実を結びつつあるように感じました。最後になりましたが、ご協力いただきました運営実施委員の皆様には、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

2012年度環境ポスター・キャッチコピー入選作品について

先般当協会におきまして、広く公募いたしました G E 薬協環境ポスター・キャッチコピーにつきまして、当協会環境委員会で、総数467点の応募作品の中から厳正な審査の結果、以下の作品が入選作品候補として選出され、4月19日開催の理事会にて承認されました。

☆最優秀賞

『「人と健康」、「地球と環境」、絆を結ぶジェネリック医薬品』

高田製薬株式会社

後藤 克則

★佳作

『今こそみんなで取組もう 地球と私たちの未来のために ジェネリック医薬品』

高田製薬株式会社

伊藤 健

★佳作

『わたしの大切な人へ、大切な地球へ・・・ジェネリック医薬品』

沢井製薬株式会社

藤井 法隆

★佳作

『人・地球 守るべきすべての生命のために ジェネリック医薬品』

沢井製薬株式会社

杉原 正久

★佳作

『緑ある大地 生まれ来る命 大切にします ジェネリック医薬品』

ニプロファーマ株式会社

南 貞夫

★佳作

『よりよい地球の未来と環境へのかけ橋 ジェネリック医薬品』

ニプロファーマ株式会社

宇野 あゆみ

● 2012年度 環境ポスター・キャッチコピー最優秀賞受賞者より

キャッチコピーを考えたとき

高田製薬株式会社

後藤 克則

今回のキャッチコピーを考えた時、先ず思い浮かんだのが2011年3月11日に発生した東日本大震災でした。

皮肉にも突然やってきた災害が、何気ない日常生活がいかに幸せであるかを思い知らされました。

人は、病気になってはじめて、健康であることのすばらしさに気付くことがあります。年々更新される最高気温などの発表で、地球環境の悪化が進んでいることを、私達に警告してくれています。

では、そういったことに対し私たち日本ジェネリック製薬協会はどうやって「できること」、「やらなければならないこと」を表現できるのか、考えました。

病気の治療にジェネリック医薬品を使用してもらって、人の健康を取り戻し、良好な地球環境の保全活動に、私たち日本ジェネリック製薬協会の会員会社それぞれが真剣に取り組んでいかなければならないと思いました。

そのためには、人と人とのつながり、つまり「絆」がなければ成し遂げられないと考え、キャッチコピー『「人と健康」、「地球と環境」、絆を結ぶジェネリック医薬品』を思いつきました。

より多くの方々にポスターを見ていただき、日本ジェネリック医薬品協会の会員各社は、健康と環境改善の両者に貢献すべく、活動していることを知ってもらえると幸いです。



● 2012 年度 環境ポスター・キャッチコピー最優秀賞作品



第45回定期総会報告

5 月 23 日 東京プリンスホテル会議室において、第 45 回定期総会が開催されましたので、付議事項についてお知らせいたします。

出席者：出席 39 社、委任状出席 1 社、欠席 2 社。

第 1 号議案 平成 23 年事業報告承認に関する件

第 1 号議案について、各常設委員会等より提出された事業報告について、各委員長より説明・報告を行いました。その後、議長より議場に諮ったところ、異議なく原案どおり承認可決されました。

第 2 号議案 平成 23 年度会計決算報告承認並びに監査報告に関する件

第 2 号議案について、松元常務理事より決算報告の説明、稲岡監事より監査報告について説明の後、議長より議場に諮ったところ、異議なく原案どおり承認可決されました。

議事終了後、厚生労働省医政局経済課 鎌田課長より、「医薬品産業をめぐる現状と課題」について講演を頂きました。

第45回定期総会懇親会報告

総会に引き続き別室にて懇親会が開催され、澤井会長の挨拶に続き、参議院議員 藤井 基之氏、厚生労働省医政局長 大谷 泰夫氏、日本医師会常任理事 鈴木 邦彦氏、日本薬剤師会会長 児玉 孝氏、日本製薬団体連合会理事長 木村 政之市の来賓祝辞があり、続いて2012年度環境ポスター・キャッチコピー最優秀受賞者（高田製薬㈱ 後藤 克則氏）の表彰のあと、吉田副会長の乾杯の発声により懇親会に入りました。

懇親会には、厚生労働省医薬食品局より俵木安全対策課課長をはじめ各課長・各課実務担当補佐、国立医薬品食品衛生研究所 大野所長、独立行政法人からは医薬品医療機器総合機構 成田理事、関係団体からは12団体22名の他、多数の業界紙にご参加いただきました。その後、7時30分に盛会裡に終了いたしました。

懇親会出席者は以下のとおりです。

会員：122名、来賓42名、業界紙12名

● 賛助会員から

コア商事株式会社

J G A の皆さま

こんにちは。2011 年 5 月号にてご挨拶申し上げました賛助会員のコア商事株式会社です。今再び皆様にご挨拶できることは、弊社にとって喜ばしい限りです。

前回ご挨拶出来なかった方々のために手短かに弊社を紹介いたしますと、弊社は横浜に創立して 22 年になる原薬の輸入専門商社です。本社の他、大阪にも営業所があります。日本における後発医薬品事業のベスト・パートナーとなるべく、原薬の輸入販売にとどまらず、DMF の国内管理人業務などのさまざまな業務を行なっております。

今回は弊社の組織についてご紹介したいと思います。事業の拡大に伴って過去何度か部署の新設を行ないました弊社ですが、特に 2009 年から 2012 年にかけては大きな改革を行ないました。内部的には、まず第一に医薬分析センターの設置、第二に品質保証部内に管理課と薬事課を設けたこと、第三に営業本部内に企画課と調査課から成る開発部を新設したこと、そして第四には社長を直接サポートする経営戦略室の新設です。

弊社は創業以来営業・品質保証・財務を組織の 3 本の柱として業務に励んでまいりましたが、より幅広くお客様のニーズにお応えするため、2009 年 1 月より新たに医薬分析センターを設置いたしました。2010 年に改装された 1 階・2 階の両試験室では、現在 20 名を越えるスタッフが A P I グループ・製剤グループそして品質グループに分かれ、弊社が輸入した原薬に限らず、新後発医薬品原薬の開発のための試験業務と規格の作成に携わっています。

品質保証部の組織の増強は、品質基準への要求により厳しく対応するため、業務を専門化するべく行なわれました。

また、従来 MF の管理業務は品質保証部と営業本部で行なっていましたが、2012 年 4 月の組織変更により、開発部調査課が MF の管理を専門的に行うこととなりました。

さらに、より効率的に各部署が活動を行なえるように経営戦略室を新設しま

した。経営戦略会議は定期的に行なわれ、コア商事が企業としての中期および長期の目標を見失うことがないよう、また、各部門が自らの役割を省みて積極的に活動を行なえるように社内の調整を行ないます。

これらの改革はいずれも、弊社が「どのようにしたら最も効率良く皆様のお役に立てるのか」を追求した結果です。

また2011年には、医薬品製造業者である株式会社イセイと事業提携するに至りました。2002年に関連会社として設立された医薬品製造を行なうバイオテックベイ株式会社を含め、グループ会社はこれで3つになった次第です。この各社がそれぞれの創立以来養ってきた営業力と技術力、そしてお得意様の皆様との連携によって、今後新しくご案内できる事業も出てくるかと思えます。

これからも医薬品業界においてはいろいろと厳しい状況になっていくことが予想されますが、弊社では組織の各人の力によってこれを乗り越えていく所存です。今後とも、どうかよろしくお願いいたします。



医薬分析センター外観



医薬分析センター 1F 試験室

 |活|動|案|内|

<日 誌>

5 月 8 日	総務委員会総務部会	日本ジェネリック製薬協会会議室
5 月 9 日	総務委員会広報部会	〃
	J G A ニュース編集会議	
5 月 23 日	常任理事会・理事会	東京プリンスホテル
〃	定期総会・講演会・懇親会	〃
5 月 24 日	薬制委員会	日本ジェネリック製薬協会会議室
5 月 29 日	くすり相談委員会	〃
5 月 30 日	薬事関連連絡会	〃
〃	総務委員会広報部会全体会議	東京八重洲ホール会議室

<今月の予定>

6 月 1 日	環境委員会	日本ジェネリック製薬協会会議室
6 月 5 日	総務委員会広報部会	〃
	J G A ニュース編集会議	
6 月 12 日	総務委員会総務部会	〃
6 月 21 日	常任理事会・理事会	〃
6 月 22 日	流通適正化委員会	〃
6 月 28 日	薬事関連連絡会	〃
〃	薬価委員会	東京八重洲ホール会議室

／ 編 集 後 記 ．／

J G A の活動について

昨今の J G A の委員会や部会の活動で、事務局とともに活動しているメンバーを見ると、顔ぶれが固定化しつつあると感じることがある。イベントにおいてもブース等に立っておられる方々は、どのイベントでもほとんど同じ顔ぶれのように思う。もちろん自社の業務が最優先であり、業務と直接関係がなければ参加もしにくいし、上司の許可が得にくいという場合も少なくないであろう。しかし、各委員会、部会などの活動はジェネリック医薬品の信頼性向上のみならず、ジェネリック医薬品業界全体の信頼性向上につながるものであり、重要な活動であることは言うまでもない。

数年前から国の政策としてジェネリック医薬品の使用促進が進み、決して日の当たる立場ではなかったジェネリック業界が一躍脚光を浴びるようになり、大きな批判を受けながらも追い風を受けて進むようになった。その半面、会員各社の協会の活動に対する考え方や立場の違いが、徐々に表れてきているように感じる。それが、各社のトップの考え方によるものか、各担当の方々の立場や考え方によるものなのかは、むろんわかるものではないが、積極的に協力いただく会員とそうでない会員が存在するのは事実と言ってよい。数年前のように「ゾロ」と言われていた時代には、なんとか頑張って不評を覆したいという意思を持っていた方々と、あきらめているような方々が半々であったように思うが、ジェネリック医薬品が市場に受け入れられるようになって、売り上げが増えるようになるにつれ、そういう時代を知らない人々が増え、J G A の活動に対する意識が変わってきているように感じる。また専業メーカー以外のメーカーがジェネリック医薬品に参入し、マーケティングの在り方が変わってきたことも影響しているのだろうか。ジェネリック医薬品の信頼性向上、業界の信頼性向上に熱意をもって取り組んできた先人の努力に報いるためにも、会員各社のより積極的な関与を望みたい。

(N. I)

■ 編 集

日本ジェネリック製薬協会
総務委員会広報部会

■ 発 行

日本ジェネリック製薬協会

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町 3-3-4

日本橋本町ビル 7 F

TEL : 03-3279-1890 FAX : 03-3241-2978

URL : www.jga.gr.jp